

マーシャル方面遺族会
 (旧タエゼリン方面戦歿者遺族会)
 郵便番号 154
 世田谷区野沢 3-11-3
 電話 03-424-4300
 振替口座東京 0-93487 番
 編集兼発行人 佐藤宗丕

烈日に鬼哭啾啾
 タラワ島 (10頁参照)



ギルバート諸島に忠魂慰霊碑を

会長 浮田 信家

今を去る十五年前の昭和四二年七月二二日に、現地慰霊と建碑の使命を帯びた私は、同行の佐竹幹事と共にギルバート諸島のタラワ島に上陸しました。

この小さな島で、我が軍三千名と軍属一千五百名は、一干機による爆撃と、百隻の艦艇による砲撃を浴びたあと、米軍の精鋭一万八千名を迎えうったと言われます。また、近くのマキン島では、我が軍二百五十名と軍属四百五十名が、米軍六千五百名を迎えたのは「島には虫ケラ一匹生き残ってはいまい」と言われる程の砲撃のあとであったと、戦史は述べています。

にもかかわらず米軍をして「恐怖の島」と戦かせたものは一体何であったのでしょうか！

——浜辺に立った私は、激戦に散華された先輩、同僚の心情を憶い、胸を締めつけられる思いをしたのを十五年後の今日、今尚忘れられません。

最近のタラワ島の状況は、本号9頁以下に詳しく述べられており、官民共に本会に好意を寄せて下さるのは誠にありがたい幸せであります。団員一行が、適切な判断によって、残された遺骨を丁寧に埋葬されたことには只々感謝の外はありません。

本会は、昭和四三年にマーシャル諸島及びギルバート諸島の全域を包含、象徴する慰霊碑を、タエゼリン島に建立しておりますが、この程田中雄吉様、柴崎晃様が中心となってギルバート諸島関係会員がタラワ島に慰霊碑(副碑)を建立することを計画しております。

誠に時宜を得た計画でありますので、できる限りの御協力をお願いいたします。会員の皆様におかれましても応分の御支援の程を切にお願いいたします。

目次

ギルバート諸島に忠魂慰霊碑を	1
..... 会長 浮田 信家	1
五六年現地慰霊団の足跡	2
..... マーシャル班 植田 敏裕	2
..... 飯島 祐宣	3
..... 黒川 誠	5
..... 富田 ミツ	7
..... 松本 孝子	8
ギルバート班 田中 雄吉	9
ナウル班 中山 健	12
環礁33号を読んで	
..... 小室舜司郎	13
安藤さん御苦労さまでした	13
..... マーシャル諸島情報	14
五七年二月六日の御案内	15
寄附者芳名	15
ギルバート諸島現地慰霊碑	
建立について 田中 雄吉	16
..... 柴崎 晃	16
事務局だより	16

五十六年現地慰霊団の足跡

会長 浮田信家

昨五十六年に、本会の幹旋によって現地慰霊をされた方々の概要は次の通りでした。

一、マーシャル班

(参加者) 安達智恵子、飯島祐宣、植木市太郎、同豊、植田敏裕(団長)、奥井礼子、安田房子、小笠原岩勝、同広、黒川誠、高木專治、富田ミツ、徳弘萩子、松木孝子、水野ハナ、川瀬一郎(近ツ・添乗員)の16名。

(行動) 8月21日成田発、グワム泊、マジユロ3泊、クエゼリン2泊、サイパン1泊、8月28日成田帰着。

(記事) マジユロで大統領に表敬。クエゼリンで司令官に表敬、御夫妻および島の大ぜいの方と会食。全員で飛行機をチャーターしてマロエラップ訪問、慰霊、視察。ルオット(ロイ・ナムル)に、黒川、飯島が中田さんの案内で訪問、墓参。全員で秋葉山丸戦死者の海上慰霊。クエゼリン墓参は毎日。グワム、サイパンの慰霊と戦跡視察。

二、ギルバート班

(参加者) 田中雄吉(団長)、及川よね、中村久、同澄枝、吉見千寿、小松崎満里子、今井誠一(近ツ・添乗員)の7名。

(行動) 8月25日成田発、グワム2泊、ナウル2泊、タラワ6泊、9月4日成田帰着。

(記事) キリバン共和国イエレミア・タバイ大統領を表敬訪問のところ、旅行中のため外務次官に面接、官民の欲待をうける。政庁の好意により遺骨数十体をメモリアル広場に埋葬し、仮墓石を建てた。在島中毎日ベント島訪問。グワム島慰霊、戦跡視察。

三、ナウル班

(参加者) 中山健と通訳1名。

(行動) 8月23日大阪発、グワム2泊、ナウル2泊、8月28日大阪帰着。

(記事) 8月26日はナウルでギルバート班と同宿合流。ジョン・ウイルスさんの幹旋で政府の役人に島内を案内して頂く。浮田会長に頂いた12枚の写真の場所を確認。亡兄に縁りの人に会う。

三班とも全員目的を達して無事帰国いたしました。次にその報告を班別に掲載いたします。

紙面の都合で割愛させて頂いたものもあります。が御寛容下さい。

マーシャル班

大任を果たして

広島市 団長 植田敏裕

八月二十五日、お世話になったマジユロの皆様のお見送りをうけて、一行は目的地クエゼリンに向かいました。空に一片の雲もなく、飛行機は一直線にクエゼリンへ。

途中物すごいスコールにあい、大分揺れましたが、無事着陸。皆さん、それぞれ緊張しておられました。

機扉が開かれると外は海のようにです。我々の来訪を知って八千の英霊が嬉し涙の出迎えなのでしょう。三十七年前のことが思い浮かばれました。

ロビーに入り、税関長から「御苦労さまでした」とやさしい声を聞いて、一行は日本出発以来の不安と緊張が解けてなごやかに話し合いました。

大里さん、中田さん、徳原さん、アンブローズさん達に迎えられる、空港近くのロッヂに案内されて休憩しているうちに雨もあがったので、大里さん、中田さんと墓地に行きました。

きれいに清掃された墓苑、澄みきった空、ここが三十七年前にあのはげしい戦いのあった場所とは！最愛の夫を、父を、兄を、弟をそして愛児を失った遺族にとって、戦争とは一体何で

あったか、をつくづく考えさせられませう。

宿舎の米軍ロッヂは、日本を発つて以来の、ホテルらしいホテルで、マジユロとの相違を感じました。

一夜明けると、昨日と違って変わったクエゼリン晴れ。雲一つなく晴れわたった青空の下で午前九時から、同行の飯島導師の真言宗による慰霊の祭式が行われました。

思い思いに日本から持って来られた御供物を供え、飯島導師の読経のうちに、一人ひとり供花、焼香し、最後に全員で「海ゆかば」を斉唱しました。

この間、アンブローズさん外基地の方々や、大里さん、中田さん達が一時間半もの間見守っていて下さったのは、本当にありがたいことでした。地下に眠る英霊たちも感謝しておられることと思われました。

炎暑の中での礼装のお参りで皆さん全身汗びっしょり。特に同じ姿勢で読経をつづけられた飯島様は流れる汗をぬぐわれもせず、一途に鎮魂の行に徹せられるお姿には、頭の下がる思いがいたしました。

昼食の後、急に、飯島さんの兄さんの乗っておられた秋葉山丸の沈んでいる所に舟を出して頂けるとのことで、急いで仕度をして一行全員乗船しまし



クエゼリン墓参

た。
波静かなこの海で、地獄の戦闘があったとはとても信じられません。各々線香を海に捧げ、英霊の安らかな御冥福をお祈りしました。
同じ朝、おねがいしておいた中田さんから、ルオット島行きOKとの回答があり、黒川さん、飯島さん、中田さんに行っていたできました。
黒川さんは、日本出発の時、ルオット行き不可能と覚悟されていたので、

殊の外喜んで下さいました。
夜七時、海岸に近い所でパーティーが開かれ、司令官御夫妻外大ぜいの方が出席されて、心からのおもてなしに預りました。
なごやかなパーティーのあと、全員整列して、司令官に、御礼を申し上げ、今後のことなどお願いいたしました。
あとで地図を見ると、この辺りは司令部のあった所、最もはげしい戦闘の跡と思われまふ。
夜十時、宿舎に帰って相談の結果、今からお墓へときまり、大里さんの外日系女性二人と共に、夜の墓参をいたしました。星空の下で、墓碑を真中にして車座になり、一人ひとり故人の思い出を語り合いました。
墓前のローソクの灯も夜空の星も、私どもの気持をわかってくれるようで、心安まる思いがいたしました。宿舎に帰ってからも、夜の更けるのを知らずに語り合いました。
二十七日は、この島も今日限りと、朝食のリングゴやその他の果物を供えてお参りしました。一同で、墓碑をきれいに洗い、整列合掌してお別れを申しました。
激戦の跡に、米軍によって丁寧に葬られ、管理されている墓地を見て、フト何か不思議な運命を感じました。
帰路、日本軍のトーチカに入ってしまった。銃眼は砲弾で大きく引き裂かれて傷跡も生々しく、思わず目をそむ

けて足下の土を掘ったところ、遺骨の一片が出てきました。ハツとして、もう少し早く来ればよかったと後悔し、「ごめんなさい」と頭を垂れました。只一つの心残りです。
宿舎に戻り、仕度をして、十二時四十五分自動車で空港にまいりますと、アンブローズさん、税関長、大里さん、中田さん、徳原さんその他大ぜいの皆様が見送って下さいました。
十二時五十一分、機体は滑走を始めました。後髪を引かれる思いでなつかしいクエゼリンの島影を眼にやきつきました。遠ざかる島に、又キット来ますよと心のうちで。
今回は団長の大役を仰せつかり、皆様の御協力のおかげで大過なく任務を果たすことができました。
又、事前の御手配や御連絡を微に入り細にわたって余すところなく処理された浮田会長さんに、一同心から御礼申し上げます。殊に、出発のとき、帰国するとき、成田まで見送り、出迎えをいただいたことは只々感激するばかりでした。ほんとうにありがとうございます御座いました。

クエゼリンの一日

東京都 飯島 祐宣

当に信じ難く、如何程吾等遺族、邦人を待ち侘びたであらう。戦争は悲惨で敗戦は末永く、特に遺族を悲しみと、苦しみに陥れる。
昨日来の南洋の大雨も上がり、雲一つ無く澄みきった碧空、美事に刈り込まれた瑞々しい芝生内のここクエゼリンの日本人墓地、英霊碑は日本各県の名石を集められたとか、表面は日本地図を絵書かれています。
植田団長以下十五名、各々故郷より持参した米、酒、水、産物、煙草等をお供えする。故国の香りが漂う。
方に今クエゼリン地区戦歿英霊八千余柱に献華、香を薫じ、理趣三昧の法要。この地で尊い生命を捧げられた英霊に深甚なる報恩謝徳の供養を厳修す。行んで灼熱の下、感涙と汗の読経三昧。どなたか拙僧の顔をご自身のハシカチで再三拭いて下さる。有難い。しかし英霊の最期の苦しい戦い、炎天下飢えと熱病、敗戦の地獄図を偲べばこの熱さは比較も出来ない。
続いて「怨親一如平和和讃」の奉詠
阿字の子が
阿字の古里立ち出でて
七つの海や六つの陸
世界を挙げて戦いし
世紀の戦治まりて
平和は永に返りきぬ
いま殉国の生にえに
感謝のいのり捧げつつ
民主の国をうち立てて

供養の塔をきづかなん
洋の東西ことなれど

仏の慈悲はかわらねば

怨親一如念じつつ

いざ弔らわん諸共に

また立ち帰る阿字の古里

戦後私共の宗団で一番よく唱えられた御詠歌で、わが師なる高幡不動尊御貫主秋山大僧正宛下作の和讃である。

次いで植田团长さんが持参された五種香で順次ご焼香、それぞれありし日の夫、父、兄弟、息子の姿を憶い浮べ異国に眠れる英霊の冥福を祈られた。

最後に故国の父母や妻子の名を呼びつつ殞れた痛恨の涙滲むこの地に、墓参団全員で「海行かば」を淑やかに合唱す。

法要終了後、随喜された大里さん、中田さん、憲兵隊長さん方と慰霊碑前で記念撮影する。

午後一時過から念願叶い海上慰霊の奉修。墓参団全員の方が参加して下さる。このようなことが実現出来るとは夢のよう。大里さん方のお骨折りで大型船を出航させて頂けることとなった船は定員百名位の立派なもの。

クエゼリン環礁の海は湖のように碧く、静かに私達を迎えてくれる。約十分で秋葉山丸沈没現場に到着、陸地より八百米、水深三十米とのこと、沈没地点に赤色の大型ブイが「この下にいるよ」と呼んでいるように静かに揺れている。停船したエンジン音も私達

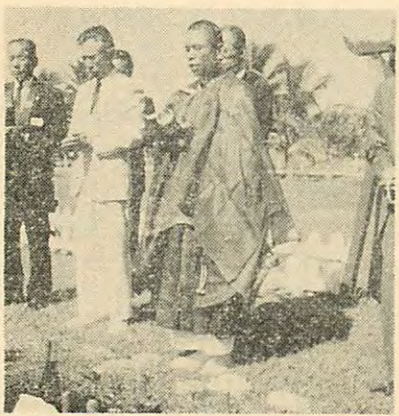
の墓参に来たことを英霊に密に囁いているように物淋しい。

この下には兄を含め乗組員五十四名、四千六百トンの輸送船秋葉山丸が眠っている。乗組員は沈没前に上陸出来たか、運命を船と共にしたか不詳。いづれにしてもこのクエゼリンに眠っている。

海上慰霊はこの環礁で沈没した数知れない種々の艦船、殉職された英霊を回向す。参列者全員の方が海上に香を薫じて下さる。散華を持参すれば尚一層の供養になったのにと悔まれる。

今は亡き母と一緒に墓参出来たらどんなに喜んだであろう……と思うとせめて母の分まで心ゆくまで供養する。

兄の戦死した場所には生涯墓参出来ないものと諦めていたのに、昨年鹿児島の実家へ浮田会長さんから、秋葉山丸のことをお知らせ頂いたお陰で、今日の墓参が実現したもので感謝の気持ち



飯島導師

で一杯。

やがて船はエンジン音を上げてエビゼ島へ。再び船先に腰掛て読経三昧。

生暖かい南洋の潮風を一杯受けて船の飛沫音に読経も吸い込まれ海中深く泌み透る感じ。

願わくは英霊よ安らかに……約一時間で海上慰霊を修了する。

午後四時過ぎ黒川さん、中田さん、拙僧と三名、セスナ機でルオットへ飛ぶ。ルオットは黒川さんの弟さんが戦死された島で海軍航空隊の基地があったそうです。このルオット慰霊は中田さん方のお世話で海上慰霊同様、急遽実現したもので誠に有難い。

晴れ渡った南海の空を高度約三百米で環礁伝いに飛行。写真や絵で見るより一層鮮やかに珊瑚礁独特の美しさが眼下に広がる。空も海も紺碧で水平線と空が微かに区別出来、三百六十度視野が開け環礁が点々と美観を添えドラマをつくる。勿論生まれ始めて見る景観である。

このような極楽世界を思わせるクエゼリンで悲惨な戦争があったとは嘘のよう。

環礁の個々の島は小さく五百坪とか千坪位。椰子の合間に家や人もはつきり肉眼で見える。このような小島で敵機に低空攻撃され、逃げ惑ったであろう英霊の姿が手に取るよう想像出来る。

環礁の浅瀬の内海と外海に赤錆た魚

雷艇が真二つに切れて横たわり痛ましい。思わず合掌して光明真言を唱う。

暫くすると中田さんから「この島で佐竹さんが戦死されたのです」と教えられる。誰方のことか予備知識がなく申分け無く思う。千坪もあるうか、若いパイロットの方が旋回しながら高度を下げて下さる。尚一層人影等が明瞭に見える。更めて回向す。

やがて大きな島影にレーダーや滑走路が眼下に開ける。ルオットである。クエゼリンから約三十分。地図で見ると環礁の半経地点、クエゼリン環礁は世界最大級とか流石に絶景である。

着陸すると小学生時代神戸に住んでいたという、アレン、アルテッソン等三名の方が私達を迎えて下さる。

アレンさんは日本語が上手でしかも話が判り易い。島内をゆっくり案内したいと申し出られるが、私が今夕約束事があるため持ち時間の無いことを了承して頂く。

先づ日本人墓地で慰霊法要。残念ながら本島慰霊と違い小人数での供養になる。読経が済んでも黒川さんは墓前に跪き英霊に何時迄も語りかけている。後姿を覗いていると一層涙を誘う。

回向後、代る代る記念撮影をし、戦跡を案内して頂く。司令部跡や倉庫等も弾痕が痛ましく、コンクリートの柱が剥ぎ取られ、天井は大穴が開いている。島内の未整備地区には今でも銃砲弾等が多数見つかるとのこと。日本軍

がシンガポールから持ち込んだという英軍の赤錆びた大砲が外洋に向けて据え付けられたままになっている。ルオットはタロアの戦傷残るそのままと、クエゼリンの整備された双方が存在し戦争の残忍さが今も残っている。

何時迄も長く滞在していた黒川さんを追い立てるようにルオットに別れを告げるが、氏の心中を察すると心が痛み、後髪を引かれる。

離陸したセスナ機の窓にも何時しか薄雲が広がりが環礁も夕暮に包まれようとしている。

クエゼリンロッジに六時半帰着。約束の時間を三十分経過してう。保志条さんが笑顔で私を待っておられた。保志条さんは沖縄県出身の二世の方だそうで昨夜ショッピング中に小さな真鍮板に書かれた文字の読み方を教えて貰い度く私に声を掛けられたもの。その板には「機関土浴室」と刻んであり友人のダイバーが沈没船から引き揚げたものと判る。

又秋葉山丸についてダイバーの方が潜水したことがあるか聞いてくれることになる。早速電話で同船から引き揚げた色々な品物を保有しており、中に船長の航海日誌も含まれているという。沈没当時の様子が解るかもと昨夜は心休まらず寝付かれなかった。

保志条さんに案内された部屋にミスキャンベル、ウルフさん、ヨリメンズさんの三名が迎えて下さる。キャンベ

ルさんはクエゼリン病院の看護婦さん、ウルフさん、保志条さんも同院の看護婦さんとのことだ。男性。

部屋はあまり広く無く、日本のクラブのような雰囲気でおレンジ色の電灯に装飾品が所狭しとばかり陳列されている。それもその筈、この部屋はキャンベルさんの独身寮とのこと。

保志条さんが通訳して三人のダイバーの方と会話が始まる。クエゼリンには約百名のダイバーが居り大部分は魚貝類の採集をしており、沈没船内の収集は極限られた人達だと言う。

沈没船はそれぞれ三十数年も放置されており、大きな鉄骨部分を除き腐蝕が著しく、遺品等は崩れるものが多く引き揚げても真水で洗い流す数週間の作業が大変とのことだ。

昨夜電話で知らせて頂いた船長の日誌については間違いであることが判明し、愕然とする。しかし立山丸、第五日ノ出丸、秋葉山丸から引き揚げられた数十点の遺品等を見せて頂く。

戦地から故郷の父宛の木の荷札、木の印鑑、ゴム印、部屋のものらしい鍵、身に付けていた釦、バッヂ、湯呑等々手に取ると英霊にお逢いしているよう涙が滲む。

他船のビデオテープを見せて頂く。とても良く撮映されており、テレビで放映される専門家の出来映えである。赤錆た船体に貝類が一面に付着し、多数の熱帯魚等が遊泳し、海底の美しさ

は戦争を忘れさせる。

船内に眠る英霊の遺骨の有無を伺うが彼女等は顔を見合わせて戸惑いをみせる。自分が僧侶であるからと何回も強要する。やっと見たことがあると顔を曇らせる。

これ等の遺品を日本の遺族へ頂いて帰りたいとお願ひするが一部については躊躇する。仕方なく日本人の墓地観、供養の方法、千鳥ヶ淵墓苑のこと、又私自身クエゼリンの土と海の砂を持ち帰り実家の墓地に埋葬すること等説明する。彼女等は話合っていたが他のダイバーの所持品と判る。これ等の遺品はクエゼリンを離れる日、ロッジと、わざわざ空港へ持参して下さい。

このようにダイバーの方々にお会い出来たのは英霊の導きのお陰と感謝する。今晩現地の方々により歓迎会を催して頂くことになっていたがダイバーの方々と長時間お話ししていたため欠礼してしまふ。

今回クエゼリンに墓参して感激したのも現地の大里さん、中田さん方の日頃のお世話と浮田会長さんをはじめ関係者の方々の永年積重ねられたご努力の賜と感謝するもので、墓参団に参加出来て本当によかったと熟々思う。今日一日は人生の中で一番忘れられぬ日となるであらう……

眠れずに 念仏三昧 椰子の島

合掌

ルオット島に墓参して

東京都 黒川 誠

今年のマーンシャル方面遺族会の墓参団にはじめて参加することが出来て、永年の夢であった墓参が出来たことは何ものにもかえ難い大きな喜びでした。

九段会館で行われた説明会も定刻より早く行って待つて居りました。先づ浮田会長さんの挨拶にはじまり次いで参加者の自己紹介がすんで説明も中ばをすぎた頃、今回の参加者十五名の中でクエゼリン島以外で戦死された遺族は私と富田さんの二人と判りました。

マロエラップのタロア島で戦死された遺族の富田さんは、説明会の席上で浮田会長さんより、90%墓参は可能である旨の回答がありましたので、あとは飛行機のチャーターと時間の問題だけとなりました。

私の場合弟はルオット島で戦死しているもので、クエゼリン島まで行ってその先の島であるルオットには何故行くことが出来ないのか。それはクエゼリン、ルオット両島とも米軍の重要な基地になっているためと言うことです。

今回クエゼリンの墓参は米軍司令官をはじめ基地関係者の理解あるご厚意で特別に許可を受けられたのでそれ以上上の依頼はむづかしい旨を会長さんからも聞かされまして、富田さんとは逆

に90%以上不可能であると知らされた時は喜びが半減した気持でした。

私のがっかりした表情を見て隣りの席にいた団長の植田さんは現地（クエゼリン）に着いたら知人も居るので行けるように何とか頼んでみるからと言ってくれました。

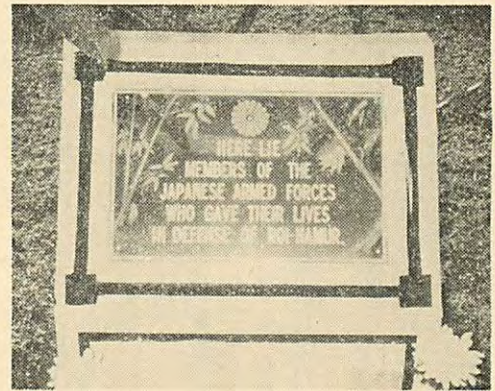
今回は米軍基地司令官のご好意で宿泊から食事までお世話下さると言う今迄にない大幅な受入れの緩和であり、それ以上の要求はむづかしいもの自分にも言いよかせ、クエゼリンに着いたらルオットの方向を聞き、心から感謝の気持をささげてご冥福を祈りたいと思つて居りました。

マジュロを発つて私達一行は横なぐりの激しい雨の中をクエゼリン空港に到着しました。宿舎である米軍のロッジに案内されてそれぞれの部屋に別れておちつきました。

部屋も設備も近代化されて申分ないのですが、米国人の体格に合わせて作られているだけにすべてLサイズで私達にとって大は小を兼ねないところもあります。マジュロのあとだけにその設備の良さがよけい強く感じられました。

大里、中田、徳原さんが私達を空港から宿舎、食堂、売店等を案内して細かいお心づかいを下され、ご自分で車を運転されてどこへ行くにもその車へ乗せて本当に親切にして下さいました。

ルオットの碑



団長の植田さんからルオット行が出るよう頼んでみるから明日まで待つようにと言われましたときは、何んとしてもここまで来たのだから行けるよう祈りたい気持で一杯でした。

明日は午前九時より慰霊祭を行う発表があり、それぞれの部屋に戻り、亡くなられた肉親の方々の想い出を夢にえがいて心静かにやすまれたことと思えます。

明けて二十五日、慰霊祭の当日です。昨日の悪天候とはがらりとかわつて空は抜けるような青空で、南の太陽はまぶしすぎる位いの好天気めぐまれ、定刻慰霊祭がはじまりました。

各人が、持参した供へ物、お線香をあげ、正装の僧侶姿の飯島さんの読経が流れる中で私達はしばし黙禱を捧げ

て、心から肉親をはじめ数多くの英霊のご冥福を祈り、お参りを致しました。

全員背広喪服に着かえて炎天下六〇分以上の慰霊祭が終了したときは汗でびしょになりました。

気がついて見ますと大里、中田、徳原様をはじめ米軍基地関係者も私達の慰霊祭が終るまで少し離れたヤシの木陰から見守ってくれて居ました。

真青なみどりの芝生を白い柵に囲まれた墓地はきれいで静かな佇いの中に安置されています。

私達は、生きている限り次回も更にもうその次も墓参に来ますから、どうか安らかにご冥福をして下さい。今回は最年長八十六歳になる植木さんも参加して墓参されました。あなた方のことはいつまでもいつまでも忘れませんと心の中で念じつつ。

午後、飯島さんのお兄さまの乗船していた秋葉山丸が同島の近くに沈んでいることが判り、大里、中田さん等のご尽力と米軍基地関係者のご好意で船を出してくれまして、ドラム缶に似たブイの浮いている沈没現場に行きました。

きれいな礁湖の中で波も少ない水面には赤色の写真の様なブイが静かに浮んでいました。

このブイの下三十米の深さのところには秋葉山丸が沈んでいると基地のダイバーをやっている方々の話です。

私達も船上からご冥福を祈りました。島も海も南洋は非常に美しく、公害やら汚染と同居している私にはすべてが別天地のようなところに思えます。

船から上った私に、ルオット島行OKの朗報が、中田さんから知らされました。念願が叶へられて行くことが判ったときの喜びはとも言葉には現すことはできません。同行の皆さんからも、よかったね、よかったねと言われて、もう心は既にルオットへ行つたような気持になり胸の中がジーンと熱くなりました。

一六時三十分、中田さん、飯島さん、私、それにパイロットの一行四名を乗せた小型機は、快晴の好天候にめぐまれて環礁伝いにルオットへ向いました。

空から見るのが一番美しい環礁を、眼下に飛行すること三十分、やがてルオット島の美しい姿が見えて飛行機が滑走路に着陸したとき、夢にまでえがいていた実感がだんだんと強くなりました。

すでに中田さんから連絡を受けていたのでしょう、日本語の達者なアレンアルテッジさん他三名の方が迎へてくれて、早速車で墓地へ案内して下さいました。

はじめて見る墓地は、みどりの芝生が一面にきれいに手入れされたところで、白い柵に囲まれ写真のような立派

な墓碑が安置されておりました。早速墓前に持参した品を供へて飯島さんに読経をお願いしました。

弟に話しかけるように、永い間来られなくてすまなかったと詫びると共に、今回遺族会の墓参に同行出来てお前に会いにきたこと、それも米軍基地関係者皆さんの深いご理解と温いご厚意があったからと二重の感激に有難いのと嬉しさで涙がでてしまいました。オヤジもオフクロもお前のことは忘れたことはなく、三男は暑い島で苦労したんだらう可愛そうに、運が悪かったんだと、毎年二月六日の慰霊祭にはお参りしてくれたんだよ。その両親もすでに亡くなっていないけれど、弟や妹達はそれぞれ家庭をもって平和に暮しているから安心してくれよ。

戦死した地名だけは以前から判っていたが、その場所がどんなところで、どのような状況であったのか想像も出来なかったけれど、今回来て自分の眼で実際に見る事が出来ました。

先づ飲料水の不足であったらうと思います。毎日降るスコールが唯一の資源でしょうが三千人近くの人々を支える生活には足りないと思います。それと島全体が平地と同じで海面より二、三米の高さで攻め易く、守り難い地形では米軍の総攻撃を受ければ全滅するの三日はかからないだろうと考えられます。

毎日毎日暑い気候の中で十分な食料

もなく水不足や電灯のない生活の連続、そうして敵の攻撃を受ければ身をかくす壕もないまま、全員玉碎と悲惨な運命に散華した英霊に心から感謝してご冥福を祈る気持で一杯でした。

僅か60分の短い時間の墓参でしたから、ルオット全島を見ることは出来ませんでした。

空から見た島の形は、中央部が極端にくびれたようになって左右に広く、私の見たところは左方の飛行場の滑走路がある部分です。日本人墓地は滑走路からは車で十分位のところにあります。

戦後三十六年も経過した今日では当時の事は何も判らないくらい島全体が変わってみどりの青々とした芝生が広く、その中にヤシの木が植えられてクエゼリン島のように建物が多くないのが印象的です。

この静かで平和な佇いは、軍事基地でなければ別荘地の様にも思えます。とても三十七年前にこの島で言を絶するような激戦があり、三千人近くの人々が玉碎したとは信じられないくらいです。

ただアレンさんの案内で何か所か戦跡を見せてくれましたが、三十センチ以上もあるだろうと思われるコンクリートのトーチカや軍司令部の建物が砲弾による大きな穴があいて破壊されている現状をみると、攻撃のすさまじさが偲ばれます。

機会があればもう一度来て、時間をかけて更に数少ない戦跡を尋ねて当時を尚一層偲んでみたい気持で一杯でした。去り難い心を残して墓参を終えた私達は帰りの機に乗りクエゼリンに戻りました。

終りに今回の墓参で感じた事は、米軍基地の司令官以下関係者の皆さんが非常に好意的で良くして下された事です。殊に慰霊祭の行われた夜は歓迎パーティーを開いてくれました。

たまたまその席上で、米国軍人の奥さんと思われる女性から私達に、あなた方はどんな気持で墓参されるのですか、と言う内容の質問を受けました。

それにつけ加えて戦死された肉親の遺族であるあなた方は米国に対して強い憎しみや恨みを新たにするのか、聞かせてほしいと。それに答えて私達は、戦争があり戦死したのは非常に悲しいが、現在こうして墓参に来られるのもそうした尊い犠牲があり、国を守ってくれたからで、その戦死された肉親を含めて数多くの英霊に対して心から感謝の気持でお参りに来たものです。

従って恨みや憎しみの気持などは全くありません。英霊のご冥福を心から祈り感謝の念で一杯ですと答えました。今回のように充分な時間がありますと墓参の目的や私達の気持を直接話して相手に伝へて理解してもらうことが出来ます。

それによって次回から更に墓参団の

基地側受入れが緩和されてくれれば行き易くもなり、遺族の皆さんもより多く行くことが出来るようになることをねがっております。

マロエラップ

福島市 富田ミツ

私は昭和53年8月にも現地墓参に参加しましたので今回で二度目の墓参となりました。

当日は予定より大分時間が遅れ、8月21日20時55分の成田発日航941便で出発致しました。そしてグアムに翌朝一時過ぎ到着しました。

その日は一休みしてグアム島内の戦跡、慰霊塔を参拝し、マジエロに着きましたのが夜の12時を過ぎておりました。それにもかかわらず前回同様、島の方々がオーストラリアを持参して出迎えて下さいます、本当に有難いことだと皆で感謝致しました。

今回は全員同じホテルに宿泊できました。それに前回に比して立派なのに又驚きました。午前はゆっくり休み、午後はローラ岬を見物して、夕方7時から島の方々のパーティーに御招待されました。そして懐しい昔の軍歌や、当時の流行歌を歌って時間の経つのも、又年も忘れて青春時代に返った気分が一時を過ごしました。

明けて24日は、山村様の御尽力に依りましてマロエラップ行16人乗りの飛

行機が都合ついたと言うことで、朝6時出発マロエラップに7時に着き、1時間の余裕で墓参をして9時には又マジュロに到着すると言う事でした。

当日は天候も大変恵まれ、空から眺める島々の景色は絶好でした。島内は椰子の木が茂り、戦争のすさまじかった傷跡がそこに見られます。時間が無いので大分急いで歩きましたが、島の老人の方に会い団長さんの説明に納得されて墓の所まで案内されました。

当時の給水塔であったという草むらの中に、古い石碑らしいのが見つかりこの塔の中に遺骨を全部集めて日本に帰ったが、後に遺骨収集団が来て持ち帰ったという事を伺いほっと致しました。私は、内地から持参したお供物を出して供えるのにせい一杯で夢中で時間ばかり気がかりで何をお話したら良いか判らぬ内に引揚げの時間になっていました。

それでも戦死の場所をこの眼で確かめて来られた事だけで今回は念願の目的を達成したと思うと、とても体の中心がすっきり致しました。心残りは墓碑の廻りの除草が出来なかつた事です。今回は飯島様がいらっしゃいました

ので有難い読経を戴き、地下に眠る英霊もどんなにか喜んでいたことと思ひ感謝致しております。

今回はクエゼリンのロッジ裏で全国御英霊の皆様のお冥福を祈つて又灯笼流しを致しました。今回の墓参は皆様充分御満足の方行く墓参ではなかつたかと思ひます。

クエゼリンでは墓碑の前で、夜は御灯明しをつけて全員思い思い英霊に語りかけてお別れを致しました。又、クエゼリンに働いておられる大里様、中田様方の御好意でパーティーに出席なされた日本女性の若い方々も2人御参り下さいまして、御命日の2月6日にはこれからもお参りして下さいという約束をして下さいました。遺族にとりましてはこんなに嬉しい事はありませぬ。

私は中田様や大里様に、今は皆様がいられしゃるので墓碑も充分お護り頂けますが、皆様がこの職場をお辞めになり米本国へお帰りになられた後の事を考えると悲しくなると申しました。その事では特に御返事はありませんでしたが、パーティーに御出席下さった方々の中には、きっとこれから遺族会の事を御理解下されて御協力頂けること

と信じております。その為にも遺族会からお若い方々に今後も御参加下さるようお願い致します。

クエゼリンでは、基地の中を自由に行動出来、写真も沢山写して良い思い出として残りました。

道に迷って米軍の御家族の方の御好意でタクシーを呼んで頂いたり、その上珍しい貝をお土産に戴いたり、本当に御親切にして頂いてこの御好意は忘れることが出来ません。

これも偏に会長様や役員の方々の日頃から現地に対する御配慮があつたので感謝致しております。本当に有難うございました。

又此度、団長の植田様始め御姉妹の皆様には大変お世話になりました。心から厚く御礼を申し上げます。

最後にお願ひでございますが、現地墓参はどうぞ若い世代に引継ぐまで皆様と続けて行きたいと願ひものがございます。どうぞ毎年行けることなら、まだ行かれない方々の墓参を許可して下さいることを念じております。

クエゼリン島

仙台市 松木孝子

八月二十一日夜成田を立ち、グナム、マジュロを廻り、クエゼリン島に二十五日に着きました。

長い間の念願が叶い、ここがクエゼリンと思うと胸がいっぱいになり、飛行

機を下りるのも夢心地で涙がこみ上げてくるのを抑えるのがやっとでした。クエゼリンに宿泊させて頂き、ゆくりお墓参りが出来るようになりましたのも会長様の御尽力と米軍司令官の格別なお取計いによるものと思ひます。

滞在中の大里様、中田様始め皆様の御親切にはお礼の申し上げようもございません。翌日お墓参りに行きました。墓前にお供物を上げ、今年は飯島様が御一緒でしたので有難いお経を上げていただきましたので、心ゆくまでお参りすることが出来ました。

青い空と海、白い砂浜、きれいな芝生とヤシの木、ほんとうにきれいな島でした。こんな美しい島であつたのは戦いがあつたのかと思うと、胸がいっぱいになりました。

墓地の芝生もきれいに刈られ、皆様がいいつも心にかけてお掃除して下さいるのには感謝致します。今回はタロア、秋葉山丸、ルオットで戦死された方々のお参りも出来ました。英霊もどんなにかおよろこびでございませう。

今のクエゼリン島はあまりに美しくなりました。昔はマジュロ、タロア島のよ宿舎のうしろの砂浜から貝と砂を持ってかえりました。来年二月の命日にお墓に納めます。無事お参り出来たのも会長様や島の方々のおかげでございます。ありがとうございます。

外島人の守り慰霊碑
みまよせすくハ平和を

昼 間 染 平

ギルバート班

タラワ島慰霊

長野県 団長 田中雄吉

昨一九八〇年にもギルバート諸島タラワ、マキン慰霊の呼びかけがあったが、人員がまとまらず中止となった。

そして今年にはナウル班一名を加え総勢十一名の希望者があったが夏休み中の為飛行機便が確保出来なかつたと、又、日程がタラワ滞在日数六日間

(滞在二日間も可能ではあったが二日間では激戦玉砕の島ベシオを見るだけで終る)となり、帰国が九月に入る等の理由で結局参加者六名という事になった。やむなく参加を中止された方々には本当に申し訳ないと思いました。私は前回に一度タラワに行った経験があるということで浮田会長より今回の団長を引受ける様要請されました。

八月二十五日(火)出発、九月四日(金)帰国まで無事に慰霊の旅を済せることが出来たことを幸に思います。以下今回の行程を日程順に報告申し上げます。

八月二十四日(月)午後三時、出発前の打合せを九段会館に於て浮田会長、佐藤副会長出席の上で行いました。会から、慰霊祭用のお花やお供物代金のほか、線香、ローソクその他こ

まかいものまで御用意頂き、又、キリバン共和国大統領宛の書状も会長名にて出されて居り、途中宿泊のナウル共和国のジョン、ウイリス様にも手配がされて居り、諸事万端全く行き届いた御配慮に恐縮しました。

その上会長及び参加を御都合で中止された柴崎晃様から餞別を頂き、誠に有難度うございました。埋葬の為の諸費用その他に有効に使わせて頂きました。

さて、その際浮田会長から去る一九七七年に会長以下二十六名が、ギルバート諸島(含むナウル)慰霊に行かれた折の遺骨の処理について特別の依頼がありました。

本件については昭和五十三年一月発行の環礁第二十八号に詳細その報告が掲載されていますが、その際時間の関係で遺骨の後処理を現地のイギリス総督とベシオ島政府の方に御願ひして来たが、どの様に処理されたかを確認してくる様にとのことであります。

第一日 八月二十五日(火)
午前六時十分京成電鉄上野駅集合。

浮田会長も来られ成田空港までの見送りにには全く恐縮致しました。

京成成田空港駅着北ウイングカウンスター前で、茨城県より参加の吉見、小松崎様も揃い、近畿日本ツーリストの

添乗員・今井さんの引率で出国手続き完了の上予定通りJAL九四七便で出発しました。

午後二時三十五分グアム島着。夜半グアム発の為トランク等をホテルに保管願ひ、観光バスで慰霊塔に参拝の後島内を視察して休息。

夕食のあと空港で待機。一行がグアム到着の際に降雨、又夜半出発の時もすごいスコール。この偶然はその後ナウル、タラワと続く。早く来て欲しいと英霊が呼んでいる様な気がする。

第二日 八月二十六日(水)

午前〇時五十分グアム島発。午前六時五十分ナウル着(時差一時間)。ナウル航空七二便は順調に飛んだ。

ナウル共和国唯一のホテルにチェックイン後夜行便の為昼食時間まで休息。浮田会長の手紙もあり、ジョンウイリスさん(本会の篤志会員)に連絡した所、昼食の際ホテルに來られ、暑いので日中は休んで夕方から島内を自動車で見学する由、誠に恐縮の至りでした。午後五時三十分御自分で運転する車と、お嬢さん運転の二台もつてきて頂き早速島内一周の御案内を受けました。

夕食はホテル隣接の日本料理店サラにウイリスさん御夫妻を招きナウル班中山様ともども会食致しました。

第三日 八月二十七日(木)

空港までウイリスさんにお見送り頂き、愈々目的地タラワに向け午後一時

四十五分ナウル航空一五一便に搭乗。飛行時間約一時間で全員夢にまで見たタラワ環礁に着陸。

宿舎オンシナイホテルのマイクロバスの迎えを受け休息の上明日からの日程につき打合せを行う。夕食はホテル内海側庭先までのバーベキュー。現地住民の民族舞踊が夜遅くまで続いていた。

第四日 八月二十八日(金)

朝食後全員でバイリキ地区の大統領官邸を訪問。大統領は公務でグアム島に行つて居り、外務省に廻る様言われ、同省を訪ね次官のアタソラオイさんと面談(大統領は外務大臣を兼務されて居り、この方が外務省のナンバー2である)来島の目的を説明した所、すべて諒承の上早速ベシオ政府に電話で連絡指示をして下さった。

バイリキ港発正午のカーフェリーで左側に目的地ベシオ島を眺めながらの四十分間は全員感慨無量のものがありました。

ベシオ島の政府ではシャオンさん以下本当に親切に一行を迎えて下され、滞在中島内で慰霊祭を行いたいこと、又島内を見学したいとお願いしたところ、そのすべての諒承を得ました。

そのあとで、浮田会長より依頼のあった遺骨の件々を聞いた所、それは今でも倉庫内に保管してあるとの返事に、驚くと共にこれは大変な事でありなんとかせねばと考え、中村氏及び今

井氏と相談の上取敢えず男性だけで保管状況を見る事とし、政庁の方と倉庫に行きました。

遺骨は大きな籠三個に入れてあり、三段重ねに置いてありました。之は一九七六年に私が見た遺骨であり、翌一九七七年の慰霊団が供養し総督並びにペシオ島政庁にその処置を御願ひした筈の遺骨に間違いありません。

日本軍の小銃弾の錆びついたもの及び鉄かぶと、そしてやはり錆びた水筒が混じる遺骨は、前に見たものと全く同じです。勿論之等遺骨は日本人、米国人または現地住民の何れとも区別も出来ないものではありませんが、私どもの気持からしてもこのままにしてはおけません。

中村氏とも相談の上政庁の係官に、この遺骨を埋葬しその場所で慰霊祭をさせて欲しい旨申し入れを致しました所、即OKの御返事を頂き、ペシオ港に近い、ジャバニーズ・ウォー・メモリアル・パークではどうかとの事で、誠に良い場所と判断し是非共御願ひしたいと答えました。

つづいてシャオンさんからそれでは明日早速埋葬しますと言われました。然し明二十九日は土曜日で役所は休日ではないかと聞いた所、それは構わなるとの御返事でした。

この遺骨の処理及び取扱いについて私見を述べます。

前回浮田会長以下一行の慰霊団が折角供養し、敵重木箱に白布をかけ注意書までされたのに、この様な状態でもまだ倉庫内にあった事については総督の手紙及び現地新聞アトール・パイオニアの記事などから考えてもどうしたのかと思わざるを得ません。

しかし現地住民の遺骨に対する考へ方は宗教的な違いその他いろいろあると思います。

又別の角度から考えると、ギルバート諸島は丁度二年前(一九七九年)に旧イギリス統治圏の遠い島々と、いくつかの障害を乗り越え二三年間の準備期間を経て独立という大事業を達成して居ります。

同一国内に日附変更線を抱え総人口六万人の共和国です。これからが前途多難の国といえます。

以上のように独立という偉業を成しとげる過程のギルバート諸島として、一応約束通り依頼された祭典はパハイ教主催の下、総督ほか現地住民役人参列の上で行われましたが、問題は式典後の遺骨の処置方法ではなかったのでしょうか。海抜ゼロメートルの環礁での埋葬は日本風にはまいりません。

政庁の係官は、埋める為に穴を掘ると別の骨が出て来るかも知れないと言つて居りました。又当時はイギリスの統治下で総督以下が滞留して

居り、その下に現住民による行政組織があつて表面的はともかく、すべてがうまく運んではいなかった様にも思えます。

さて打合せが終り政庁側で用意して呉れたマイクロバスで、島内を案内して頂きました。先づメモリアル広場に行き、シャオンさんから、この中の何処の場所に埋葬するか決めて欲しいと言われ、一行と相談の上広場の略中央と決定し小石を以てしるしを致しました。

又墓石はどうするかと質問があり今回は取敢えず仮の石を置く事で諒承をして貰い、石屋さんと人夫の方の手配も一切政庁で手配して貰うことに致しました。

バスに乗車、島内を巡る。いまだ当時の姿そのままの要塞砲は、砲身が外海側に向けてあつた筈なのに、内海側に向いている。ペシオ島東側の外海側の海岸には、沢山の赤く錆びた砲や台座が海の中にも見える。全員で砂浜の貝を拾う。

帰途内海側(西側)の道路を旧日本軍守備隊本部建物近くで下車し見学する。この司令部建物の近くに政庁の事務所がある。明日の準備手配の一切を御願ひして夕方五時のフェリーボートにてホテルに帰る。

第五日 八月二十九日(土)
午前八時朝食。手配のタクシー(総

員七名のためほとんどタクシーはダクトサンのトラックである。誰言うともなく一行はこれをオープンカーと呼んだ)でバイリキに向かい、十時のフェリーボートでペシオ島着。

ペシオ政庁を訪問用意してあつたトラックに遺骨と借用の机を乗せ、中村氏と田中が便乗してメモリアル広場に向かう。今井添派員と女性四名には広場近くで待機願ひ、埋葬後来て貰い全員で礼拝した。及川さんを先頭に一人ずつシャベルで土を入れ、直ちに慰霊祭の準備に入る。(写真一頁)

政庁のシャオン・カイロさんが自ら仮墓石の彫刻をして下さつたのは本当に有難いことでした。(Right in Peace) すべての準備を終り大勢の現地住民の見守る中で、一同お供えものをし、タラワ、マキン戦没者の供養を厳肅のうち盛大に挙行致しました。中村夫人を中心とする読経、及川さんの詩吟、政庁側もシャオンさん以下参列されました。

慰霊祭終了後は政庁の方に供物の処分を御願ひして、政庁側で用意された昼食会場のレストランで御馳走になり、政府の役人の方より御挨拶を頂き恐縮しました。

食後政庁事務所立ち寄り休日にもかかわらず慰霊祭に奉仕を頂いた御礼を申し上げた。シャオンさんから広場の埋葬場所になるべく早い時期に柵を設ける旨説明があり、記念塔(碑)を

送付して貰えば、喜んでお手伝いする旨の申し出を受けました。

今回埋葬の遺骨は、前述の通り日本人、米国人、現地住民の区別は全く出来ませんが、宗教の異なる現地住民と違い我々日本人としてはとてもこのままにしてはおけませんでした。なんとしても早く土に返すというか、どんな形でも良いから埋葬すべきとの結論に達し、このような処置をして、その場所で行六名による慰霊祭を行いました。帰途はなにか重荷を下ろしホットした安心感に似た気持ちでフェリーボートに乗りました。

第六日 八月三十日(日)

朝から少し肌寒い感じさえする雨模様の日候でした。朝食の際、昨日の慰霊祭がこのような天気でなくて本当に良かったと皆さんの口から言われました。これも地下に眠る英霊の導きではなかったかと、及川さんが申されました。

今井添乗員より一応予定通り慰霊祭その他が昨日で無事終了、天候もよくないので今日の日曜日はゆっくり休養し自由行動にしましょうとの提案があり、本当にのんびりとした一日を過ごしました。

猶日程に余裕のある場合は期間中にマキンに行く予定でしたが、今回のメンバーは全員タラワ関係者であること、仮に行くとしても只マキンの飛行場に着陸するだけのトンボ帰りとなる

こと、又別費用もかかり尚今回は人員減のため当初予定の旅費以上を各人が負担すること等々の理由で、マキン環礁行きを中止し、その分毎日でもタラワ滞在中は激戦の島、玉砕の島、ベシオに参りましょうということに意見が一致いたしました。

第七日 八月三十一日(月)

午前八時三十分、ホテル発。バイリキ地区の外務省に行き、今回の慰霊祭が無事挙行出来たことを次官のアタランライオイさんに全員で御礼申し上げました。

引き続きベシオ島に渡り埋葬場所で吉見、小松崎さんの読経を行ない、内海側海岸でお塔婆ほかを焼却し、ベシオ島一番の激戦地である『攻撃側米軍の呼称によるレッドビーチ』の海岸ぞいを歩きました。

赤道直下のベシオ島は連日三十度を越す暑さのきびしい所ですが、思い出を偲びつつ歩きつづけ島の東端から学校の校庭を横切り道路に出て、巡回のマイクロバスに乗る予定がボート出発時間に間に合わなくなり、丁度通りかかったトラックにお願いしたところ笑顔で承知して貰い波止場まで送って頂きました。『どうもありがとう』に対して『どういたしまして』と日本語で

返事がありびっくりしました。以前に魚船の乗組員として日本に行ったことがあるそうです。

第八日 九月一日(火)

明日はタラワに別れる日。今日一日とベシオ島に行く。政庁を訪問し関係者に御挨拶を申し上げ、メモリアル広場の埋葬場所でお別れの参拝。

各自思いは同じ、島一番の激戦地であった此処は、先日自分達の手で遺骨を埋めた所です。私は必ずここに慰霊碑を、と心に誓い最後のお別れをしたら。及川さん、来年限霊碑を建立にタラワに来ませんかと言うと、今度は子供達を連れて来ます。何回でも、との答えが返って来た。

午後、今井添乗員に同行を願い、ホテルに近いベケニビュー地区にある病院を訪ねた。これは私個人的な用事である。去る一九七六年三十三回忌の慰霊祭に参加したとき、母の意志により息子の戦死したこの地になにか役立つものをとということで、私の職業である医療器械(卓上型高圧蒸汽滅菌器)を病院に寄贈した。

すでに五年を経過しておりスペア部品もなく果してこの悪い条件の中で汐風による腐蝕、又水の悪い場所での故障?どうなっているか?、多分すでに使えなくなつて廃棄処分となつているものと覚悟をしていた。

看護婦長さんの案内で手術室に行つた所、立派に、然かも二年位前から大きな滅菌器(オーストラリア製)が故障して今はこの器械だけが頼りである

と聞き、只々感激した次第です。この悪条件の下で使用説明注意を守

り大切に取扱ひ使用願つたことに頭の下がる気持ちでした。早速その場で帰国後追加して寄贈したい旨申し出をし、二台送付するので一台はベシオ島の病院にと依頼、寄贈に関する書類手続きその他を御願ひし明るい気持ちで病院を辞した。

(帰国後、早速慰霊碑が出来次第一緒に送れるよう手配をした。)

又五年前の訪島の際知り合いになった少年(当時十二歳)とも同日連絡がつき、夜ホテルに来た。見違える程に大きくなり現在十七歳で政府機関に勤務している由。役人としての初任給は二週間で七〇ドル。月収は日本円換算三七、〇〇〇円位で一家五人の生活が可能とのこと。帰りのバスの時間がな

いとかで食事もせず帰ったが五年ぶりの旧交を暖めることが出来た。明日は帰国するので色々な品物をプレゼント、尚中村さんの奥様からもプレゼントを頂き恐縮した。

前日夕方ホテル従業員から自転車を借りサイクリングをした折、交番で若いお巡りさんと話をしたが警官と消防士の合計約六〇〇人とのこと、給料を聞いたところ、警官になり六カ月で日本円換算月収三二、五〇〇円位とのことであった。

参考までにタラワではオートバイは九〇ccのスポーツタイプのホンダやヤマハをしてカワサキとオール日本製が二七五、〇〇〇円、サンヨーのラジオ

カセットの一番安いもので五三、五〇〇円であった。

今回遠くクリスマス島までを含み独立したキリバス共和国の首都はタラワ環礁のバイリキである。まだこれからが大変であり、ナウル共和国のように恵まれた燐鉱石の産出もなく、唯一の生産品は椰子であってあとは漁業権のみではないだろうか？

独立はしたけれど一部の環礁（オーションと聞いたが）の反対運動も盛んで政府首脳も苦勞が多いとのことである。

オーストラリアの経済圏に入っており通貨もオーストラリアドルである。

このように経済的に弱い国にも自動車をはじめとして、電気製品はかインスタントラーメンまで相当量の日本製品が見受けられた。我々一同がホテルに着いて三日間程日本人の商社マンと日産自動車の技術者が来島していた。以前はトヨタ系だったが今回はニッサン系に変わっていた。

現地語について知り得たものを参考迄にお知らせします。今井氏によれば英語がすべて通じるとは限らないとのことであることでは話せない人達ばかりあるとのことでは。

- わたし NGAI ナンガイ
- あなた NGKOE ナンゴエ
- ありがとう KORABA コラバ
- さよなら TIABO シャボー
- おはよう KONAMAURI

第九日 九月二日（水）

コナマウリ

午前九時オシントンホテル発、マイクロバスで、ボンリキ地区のインタナショナルエアポートに行く。出国手続きのあと待合室で外務次官アタランライさん御夫妻と逢う。飛行場では他島に向かう小さな飛行機が離陸している。予定通りホノルル発マジュロ経由のナウル航空が到着、一週間に亘るタラワに別れを告げ機上に。

到着の際には写せなかったベシオ島を今度こそはと念じ、スチュワードスや他の人にベシオ島はどちら側に見えるかを聞く、離陸後数分で毎日通ったベシオ島が左側窓から見えはじめた。無事ナウル着、ホテルはガダルカナル方面慰霊団一行三十名位の団体で、臨済宗の管長さん以下でなかなか賑やかであった。

第十日 九月三日（木）

ジョン

ジョン、ウイリスさんは仕事がとてもお忙しい様子で、ホテルには来られなかったが、空港には御夫妻で来て下され、一行七名に素晴らしい香りの花輪をプレゼントして頂く。本当にいろいろ御世話様になりました有難度うございました。

夕闇の迫る頃グアム島着。明日の午後四時三十分の出発までゆっくり出来ると思うと急に疲れが出て来た。久し振りで浴槽のある湯に入り、宿舎のリーフホテル最上階の和食のレス

トランクさんぐぐで会食をする。

第十一日 九月四日（金）

夜八時JAL九四八便で無事成田空港着。今回の旅行に際してはマーシャル方面遺族会の微に入り細にわたる計画により、文字通り予定通り途中一人の故障者もなく帰国出来ましたことを厚く御礼申し上げます。

空港より無事帰国の報告をと浮田会長宅に電話をしたところ、迎えのため成田空港に出掛けた由なんとも恐縮の至りでした。出発時の早朝見送り、又帰国に際して夜遅くのお出迎えには誠に申訳ないと思いました。

成田空港より箱崎ターミナル迄会長と同席し二心口頭で詳細報告を申し上げます。いづれ改めて会長宅を訪問の上種々御願いを致す所存です。

終りに私如き若年の団長を旅行中いろいろな角度より御援助御指導下さいました同行の諸先輩に対し御詫びと共に御礼を申し上げます。

尚、出発から帰国まで本当に面倒をおかけした近畿日本ツーリストの今井添乗員氏に厚く御礼を申し上げます。

ナウル班

ナウル島慰霊

広島市 中山 健

一昨年のこと、半年の間に両親を失った私は、両親が生前果せなかった兄の慰霊を是非、私によって実現しようと決意し、浮田さんをお願いして次の機会を待った。

その結果、本年八月の「ギルバート慰霊団」の企画を知り、是非参加したいと思ったが、日程表が私の職務（註、広島市立中広中学校教頭）の都合（註、日程表では八月下旬成田空港発、九月上旬成田空港帰着。同校は九月一日から新学期の授業開始）上どうしても同スケジュールでは不可能のため、不安材料は沢山あったが、単独で現地慰霊する決心をし、浮田さんの側面援助を受けて実行に移した。

勿論英語の駄目な私が、単身で乗り込んでも無理なので、グアム島から通訳を一人つれてのことである。

八月二十三日（日）大阪空港発

八月二十五日（火）一八三〇エアナー

ル泊

八月二十六日（水）タクシーを借り切り島内巡察（浮田さんよりの十二枚一組の写真を頼りに全部を確認出来



た)

(註、十二枚はナウル港短艇発着場・燐鉱石船積装置・飛行場・政庁前・総督キング・中山隊長宿舎・水交社・迎賓館前におかれた日本軍砲身・金剛山と称した砲台・ブアダ湖・慰霊祭を行った墓地・ジョルダン氏と浮田、慰霊祭を終えて)

兄の宿舎前で門柱に出発前(八月十日の命日)広島護国神社で拝受した御神酒と米を供え、兄の写真と昭和五十二年撮影の両親の写真と飾り、慰霊した。その際昭和十二年家族全員でとった写真も供えた。

まだ島内海岸線には数多くのトーチカが戦前の姿のまま残されており、当時は慰霊された。

なお、私はギルバート班のスケジュールも持参していたので、昼過ぎ、それらしい日本人グループに声をかけたところ、間違はなく田中、中村両氏を含む七人の皆さんであった。

そのようなことから夕食後ギルバート班のグループに合流させて頂き、ジョン、ウィルス氏とも歓談の機会を得た。そこで浮田さんから頂いた名刺を渡し見せたところ非常に喜ばれ二十七日の朝迎えに来るからと、彼の家へ招待された。

八月二十七日(木) 朝私達を特別に彼の家に案内してくれ(達とは通訳のこと)兄の写真を見せると良く覚えており、兄の話をしてくれた。

「当時日本軍と島民の間はとてもうまくいっていた。特にトラブルは無かった。(トラック島での残念な出来事を除けばであるが)」

私は彼を良く知っており紳士であった。彼の不幸な結果は彼の責任ではない。彼は何もしていない。(戦時中彼の外に〇〇中佐が居たが、その中佐は終戦前に帰国したまま二度と現れなかった。)

中山隊長は五人の白人の行方不明の責任を全部一人で背おい、罪人としてではなく、勇者として死んでいった。彼は偉大な日本海軍の軍人であり紳士であった。彼は何も悪いこととはしていない。……と繰り返して話してくれた。私が慰霊に来たことを非常に喜んでくれ、今後度々来るように要請された。更にウィルス氏は、前日私達が見ていなかった場所を視察するようにと言って、政府の役人で神父の人を付けてくれ、島内の燐鉱石がどのように採掘され処理されるかについてくまなく案内してくれた。その折丘の上に据えられた二門の高角砲の場所案内され、「ここは、中山隊長が度々巡察に来られたところですよ」と言われ、昔のままの砲を見るとこみ上げるものを感じた。

昼食はウィルス氏の家で奥さん手製の料理をよばれ、ギルバート班を空港で見送ることができ何かほっと

した。かくして、島内をくまなく廻り終え、十七時エアーナウルにてナウルに別れをつげた次第である。

島民の建てた慰霊碑に対して、死歿した島民と日本軍の全犠牲者に対して冥福を祈る好機会を得た。

と言うわけで、当初考えていた内容では、百五十パーセントの満足感を味わうことができ、両親に対しても、兄に対しても、また私自身に対しても、気持ちの上で区切りが出来ました。

皆様の御厚意に対し心から御礼申し上げます。兄も拾ったであろう磯辺の貝殻を持ち帰り、兄が子供の頃拾い集めた貝殻の中に納めました。

環礁33号を読んで

横手市 小宝舜司郎

第16号輸送艦は小笠原を根拠に、空に敵機、海中に敵艦の網の目をくぐって、弾薬、糧食の他故郷の便りを補給されたとのこと。艦影はシカと覚えてはいませんが、私もお世話になりました。平林様の「苦悩の糧食戦」は、体験した私にはよくわかりました。

高波の記事には、自然の力の恐ろしさを唯驚くばかりです。常夏の平和な島に余りに非常な仕打ちです。何たることでしょうか。

この度も亦本会を始めて知った方の喜びを、私も共に嬉しく思いました。

安藤さん

御苦労さまでした

あなたが本会の事務職員となったのは、本会の発足間もない昭和41年9月でした。その頃勤務していた厚生省援護局業務二課の村岡課長(本会篤志会員)にお願いで本会に移って頂いてから丁度十五年になりました。

会創立直後の煩雑な事務を、曾ての上司である浮田現会長の良き補助者として几帳面に処理され本会にとってなくてはならない人材でした。

夜間や休日にお宅で仕事をするため書類の束を抱えて満員電車で横須賀市に帰ったことも何度かありました。

本会主催の現地慰霊には三回とも参加され、その費用は会員と同様全額自己負担でした。職員としてではなく、会員の立場で参加するのだからと、会の経費支給を徹底的に拒まれたのは些か困られました。又、毎年の直会旅行の下検分も、同行の役員と同様自分で奉仕下さっておりました。

三年程前から辞意をもらわれており後任者の見つかる迄はと引留めておりましたが、五七年三月を以て正式に退職のこととなりました。

今後、何時迄もお元気で、本来の篤志会員としての立場で御協力下さいませすようお願い申し上げます。長い間本当にありがとうございました。



マーシャル諸島情報

マーシャル・アイランズ・

ジャーナル紙より

☆ 8月28日号より

火事だ

マジュロ発 8月24日

今日政府庁舎より出火し、全焼した。同庁舎は35年前に米海軍により建てられたもので官房長官・大蔵大臣・出入国管理等の事務が入っていた。

この火事はマジュロでもっとも高価な火事となる。ウイルフレッド・ケンドール内務大臣によると、損害は百万ドル(約2億円)にのぼる。思われる。重要な書類がまた貴重な記録が多数失われ

た。

グラント・ラバーン主税局長によると火事は午前3時30分すぎに予算編成のために深夜に及ぶ勤務についていたチャリス・ミューラー大蔵事務官により発見された。その時は煙の臭いを感じ、そして不審に思い席を立った。

発見後はラバーン氏を起こし、事務所の重要記録等運びだした。そして警察に通報して部屋にもどったがすぐに火がまわっていて手は出せなかった。

☆ 9月11日号より

キリ島空港開港

キリ島発・9月5日

今日、キリ島在住のビキニ出身の人々の耳はキリ島空港開港を祝う歌声によって満された。3千フィート以上の滑走路は完成し、その祝賀会が開かれた。

(注) ビキニ島の人々はビキニ島がアメリカの核実験の為に汚染されて居住できないので主にキリ島に移住している。アメリカはエニウエトック(ブrawn)環礁とともに、汚染除去作業を行なったが残存放射能が強い為、ビキニ島民は帰る事ができないでいる。この状態は当分の間続きそうである。

☆ 10月2日号より

豊作ノ？

マジュロ発 9月29日

資源開発省の青果市場は今日、ローラ村で畑作に従事している台湾人の農業開発団より、1万ポンド(約4.5ト)にのぼる野菜、くだものを受荷した。市場によると昨年の平均価格はポンド当り37セント(100グラム当り約18円)であった。

(注) マジュロでは野菜は貴重品で通常マーケットに並んでいる野菜類はすべて輸入品である。しかしそれらの輸入品は種類が限られ、値段が高くて品物も良くない。トマトなどはまっ青である。マーシャルの人々は畑作を行なわないが、台湾人がローラ村の近くに入植し、トマト、ナス、などの野菜を作り供給している。これら新鮮な野菜等はあつという間に消費されてしまっている。

マーシャルの人々は普通の食事では野菜を食べることはほとんどない。とり肉と米飯という食事が多く、緑の野菜がつけ合わせにつく事はごくまれである。栄養のアンバランスが心配される場所である。

☆ 10月23日号より

国連デー
マジュロ発 10月21日

国連デーの催しが次の様な式次にやり行なわれた。

- (A) バレード
- 1. オナー・ガード(警察隊?)
- 2. プラスバンド

3. 小学校児童

4. 高等学校生徒

5. C・O・M(?)

6. 市民

(B) お祈り……………エラクリック

(C) 開式の辞……………ミツテル・ラルホー議長

(D) 祝 辞

・ アマタ・カプア大統領

・ アトレン・アニエン報道官

・ ジナン・レビン公共社会大臣

・ オスカ・デブルム官房長官

(E) お祈りダミアン・オコンネル師

☆ マーシャル国内航空網について

現在マーシャル諸島内の空の便は、国営のマーシャル諸島航空がマジュロを基点に12の島・環礁に航路を開いている。もうひとつ民間の航空会社が不定期便を運航している様もある。

マーシャル諸島航空(A・M・I)の社長は本会でもおなじみのカサイ・ノット資源開発大臣が就任している。

マジュロよりクエゼリンへは週13便

マロエラップ、ウオッゼ、アイリングラブラブ、ミレ、リキエツブ、メジチ、アイルック、ウトロックへは週2便、キリ、アウルへは週1便、エニウエトック(ブrawn)へは隔週に1便が、16名乗りの双発機により運航されている。今後ヤルト及びナモリック便が開設される予定である。10月1日現在のマーシャル諸島航空時刻表による。

